

赤門だより

vol. 53

創立130周年記念号



赤門整形外科内科の外観



昭和63年頃の鈴木医院正面玄関



昭和10年 満州国新京で鈴木医院開業

「赤門」(安房先賢偉人伝より)

鈴木家は、代々奥州南部候(盛岡藩主二十万石)の御用達を勤め、江戸への廻漕看視役人であり、十代にわたり南部屋六兵衛を襲名せり。通称南部屋と云われ、赤門と高張りを許され、その旧態を残さんために赤門を構う。



鈴木勝太郎

かつたろう

1862 (文久2年)

国府村府中の医者平松玄齡の家に生まれる
後に親戚の鈴木家の養子となる

1882 (明治15年)

東京医学専門学校済生学舎に入る
24歳で医術開業試験に合格し順天堂医院において実地
研修

1888 (明治21年)

医院開業、産婦人科で当初から病室を持ち馬に乗って
往診を行う

1906 (明治39年)

病院を増築し鈴木病院と改称
医師3名・看護師6・7名、入院外来とも多くの患者
が来院

1925 (大正14年)

豊津小学校校医として長く勤め地域医療に貢献した
肺炎で逝去



鈴木紀

おさむ

1894 (明治27年)

勝太郎の長男として生まれる

1918 (大正7年)

東京慈恵医科大学卒業

1925 (大正14年)

鈴木病院院長就任

1935 (昭和10年)

満州国新京で鈴木病院開業

開業1ヵ月程で多くの患者が来院するようになり盛況



満州国新京の鈴木病院



馬による往診は江戸期以来の医者の象徴的な姿と言われる。後ろの建物は開業当初の「赤門鈴木医院」



石でできた朱塗りの門柱。この朱塗りの門、すなわち「赤門」が名称の由来として今日まで継承されている。

赤門 “130年”の歩み

1946 (昭和21年)

であった
館山の鈴木医院は樋口一成教授（後の東京慈恵会医科大学理事長）が分院として使用した
帰国

1971 (昭和46年)

館山市公安委員長・選挙管理委員などの公職、安房医師会理事を務めた
敗血症で逝去



鈴木勝
まさる

1920 (大正9年)

ワシントン州シアトルで大野孝雄・美代の二男として生まれる（美代は紀の妹）

1946 (昭和21年)

慶応義塾大学医学部卒業

1953 (昭和28年)

鈴木紀の養子となり鈴木病院へ

1971 (昭和46年)

鈴木病院院長就任

1988 (昭和63年)

病院を新築赤門整形外科内科と改称

1995 (平成7年)

医療法人社団 慶勝会設立 理事長就任

1997 (平成9年)

なのはな訪問看護ステーション開設

1997 (平成9年)

赤門なのはな館開設

1997 (平成9年)

安房医師会会長・理事・顧問を33年間

1997 (平成9年)

千葉県健康保険組合理事

1997 (平成9年)

西岬中学・館山小学校校医を長く務め地域医療福祉と

1997 (平成9年)

健康の保持増進に献身した

2003 (平成15年)

肺炎で逝去



なのはな訪問看護ステーション開設にあたり行われた地鎮祭の様子



1988年新病棟完成。赤門整形外科内科と改称。



10年に渡り、現地新京の医療活動に携わった。

— その人らしさを尊重する —

130

おかげさまで130周年

ごあいさつ

おかげさまで赤門整形外科内科は創立130周年を迎えました
これもひとえに皆々様のご支援・ご指導の賜物と心から感謝申し上げます
今後も地域の課題に向き合いながら、医療と福祉の密な連携により
質の高いサービスをご提供できるよう追求してまいります
なにとぞ変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます



赤門整形外科内科



介護老人保健施設 なのはな館 みさき



サテライト型小規模介護老人保健施設
なのはな館 なぎさ



なのはな訪問看護ステーション
ホームヘルプサービスなのはな
館山市認知症初期集中支援チームおれんじ



赤門ケアプランセンター



館山市地域包括支援センターなのはな



館山市地域包括支援センターいちご

医療と介護の 連携を目指して

医療法人社団 慶勝会 理事長
赤門整形外科内科 整形外科・認知症外来
医師 田中 耕一



赤門が創立100周年を迎えた昭和63年に、館山の地で医師として仕事をスタートし、早くも30年の歳月が経ちました。昭和41年に小学校の臨海学校で初めて館山にきましたが、まさかその地で就業するとは予想もしなかった事です。

赤門整形外科内科で地域医療に邁進していくにつれ、安房地域の高齢化の進行を肌で感じ、在宅医療や中間施設である介護老人保健施設の必要性を確信しました。また高齢者医療に従事するのと併せて認知症医療の重要性、そして医療だけでなく介護・福祉を並行して行う必要性も強く感じてきました。

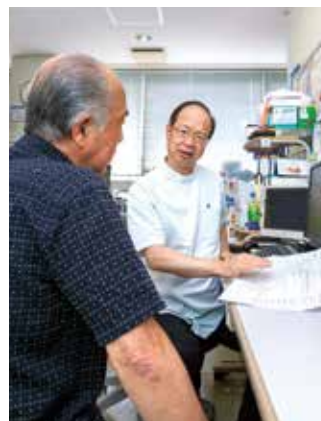
グループホームの訪問診察での出来事です。93歳の認知症の女性を診察に行くと「私の母親が赤門さんに入院して治して貰ったんですよ。先生有難う。」と毎回必ず私に向かって嬉しそうに話してくれます。おそらく赤門が産婦人科病院だった頃の話で、彼女が子供の頃の事だと思えます。そして私が当時の赤門院長だと思い込んでいるようです。この事は明治21年開院の初代から2代目、3代目（岳父）と館山の地で地域医療に積極的に携わってきた、そして

現在の赤門に変遷してきた証のように思えるのです。

130周年を迎えた現在まで、地域の皆様のご支援・ご協力や多くの有能な職員達のお蔭で、地域に貢献できる医療機関として「医療と介護の連携」を実践・成長させることができましたと感謝しています。今後も更なる超高齢者社会になっていく事が確実です。現状に甘んじることなく職員一同と共に、より一層地域ニーズに適切に応える事ができる「医療と介護の連携」を目指して尽力していく所存です。



田中医師による定期的な訪問診察は、利用者様の大きな安心に繋がっています。また、症状によっては注射等の処置もその場で行います。

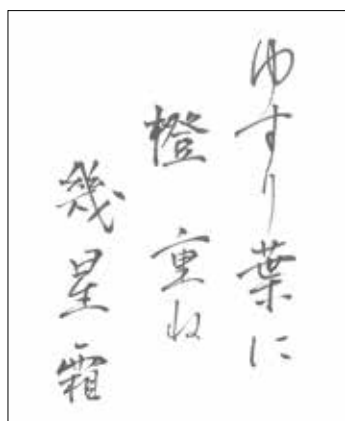


宮川医師による外来診察の様子

赤門の創立は1888年です。その時代背景は森鷗外が医師としてドイツに留学した頃に当たります。田中耕一と私が着任したのが奇しくも創立100年の1988年（田中は半年前に着任）でした。赤門は、整形外科を主に専門とする医療機関として再出発を致しました。その基本方針は、手術のできる医療機関として患者さんの困難を打開しようとするものでした。

現在も年間の手術件数は100件を堅持しているところです。産婦人科から整形外科・内科へ様変わりしましたが、この変革を快く容認し見守って下さった先代・鈴木勝の度量の大きさに改めて思いを馳せています。

「ゆすり葉に 橙 重ね 幾星霜」
いくせいそう



句、書 宮川 準

櫟（ゆすり葉）は常緑樹ですが、若い葉が育つと古い葉は茶色くなり落葉します。そのため、世代交代の象徴として正月飾りに使われています。橙（だいたい）も重ねる事で子孫繁栄を願い櫟に重ねられています。赤門130年の歴史もこのようにして、多くの人が関わり作られてきたと考えています。

赤門はこれからも皆様に信頼される医療機関として成長して参りたいと思います。

信頼される 医療機関として

赤門整形外科内科 院長 宮川 準



時は流れて

鈴木 春子（邦子）

3代目院長 鈴木 勝氏夫人



本年は赤門創立130年、赤門整形外科内科新設30年の節目の年になりました。

「2人共、赤門を頼んだよ。」という主人の母（初代勝太郎の娘）の言葉を胸に、両国駅からいくつものトンネルを抜けて館山に着いてから、早65年の歳月が流れようとしております。昭和28年の晩春の頃でした。

働き盛りの昭和10年、旧満州新京に進出し戦後、身体一つで引き揚げて来た父母（叔父夫婦）と、一人館山を守っていた祖母ろくの下、皆一生懸命働きました。

昭和30年代には、青森から集団就職の若い子供達、（働きながら館山准看護学校へ通いました。）また、医師会病院が出来た頃には韓国の看護留学生達も預かりました。患者様の給食や、若い人達の食事作りに追われた時期でした。

やがて月日は流れ結婚した2人の娘の主人、宮川医師と田中医師が思いがけ無く揃って館山来ると申してくれました。主人は後輩2人の申し出を大変喜びました。

それから30年、2人は安房の温かい方々に支えていただき、一度も心折れる事も、倒れる事も無く、地域

医療に、介護に努力を続けております。

また数年前からは孫達（姉と弟）2人が週に1、2回ずつ外来に、手術にと来るようになりました。今、忙しい赤門を一心に支える現場の職員の一ひたりとに本当にご苦労様と感謝を伝えたいと思います。

私の胸には今、「初代勝太郎、ろく」、「2代目紀、サツ」、「3代目勝」の笑顔が浮かんで参ります。病院の南側の小高い裏山は岩盤に覆われ、所々にサンゴの岩が見られます。其の昔、この地に医院を開き地元の皆様と共に歩んで来た赤門が、今後もし社会のお役に立てる事を心から願ひ筆を措きます。



国の登録有形文化財に登録された「鈴木家住宅主屋」。鈴木家は、館山港を臨む高台に位置し、江戸時代に屋号を「南部屋」と称し、盛岡藩の常宿を務めた家柄であった。明治21（1888）年に旅籠を廃業して、医院を開業。

赤門整形外科内科 ご利用のご案内 (平成30年4月時点)

- 診療時間
月～金 (午前) 9:00 ～ 12:00 (午後) 14:00 ～ 18:00
土曜日 (午前) 9:00 ～ 12:00 (午後) 14:00 ～ 17:00
- リハビリテーション
月～金 8:30 ～ 19:00
土曜日 8:30 ～ 17:00
- 外来受付時間
月～金 8:30 ～ 18:00
土曜日 8:30 ～ 17:00
- 休診日
日・祝・祭日、年末年始
(12月30日～1月3日)



最新の外来予定はこちらの
QRコードからご確認いただけます。



救急告示診療所・労災指定・生活保護法指定・原爆医療指定・公害・特定疾患・
身体障害者福祉法指定医

医療法人社団 慶勝会 事業所一覧

赤門整形外科内科

〒294-0034 千葉県館山市沼 1619
TEL. 0470-22-0008 FAX. 0470-23-2836

介護老人保健施設 なのはな館 みさき

〒294-0303 千葉県館山市浜田 110-1
TEL. 0470-29-2700 FAX. 0470-29-2777

サテライト型小規模介護老人保健施設 なのはな館 なぎさ

〒294-0045 千葉県館山市北条 2832
TEL. 0470-24-2700 FAX. 0470-24-2701

なのはな訪問看護ステーション

〒294-0034 千葉県館山市沼 1604-4
TEL. 0470-24-3113 FAX. 0470-24-3117

ホームヘルプサービスなのはな

〒294-0034 千葉県館山市沼 1604-4
TEL. 0470-24-1226 FAX. 0470-24-3117

赤門ケアプランセンター

〒294-0034 千葉県館山市沼 1637-1
TEL. 0470-22-0023 FAX. 0470-23-6160

館山市地域包括支援センターなのはな

〒294-0034 千葉県館山市沼 1604
TEL. 0470-22-1350 FAX. 0470-22-1351

館山市地域包括支援センターいちご

〒294-0043 千葉県館山市安布里 237-3
TEL. 0470-28-4115 FAX. 0470-28-4116

館山市認知症初期集中支援チームおれんじ

〒294-0034 千葉県館山市沼 1604-4
TEL. 0470-29-5301 FAX. 0470-29-5302

管理部

〒294-0034 千葉県館山市沼 1599 番地 1、1 階
TEL. 0470-25-7300 FAX. 0470-25-7301

はじめに



私たち医療法人社団 慶勝会は、明治21年(1888年)産婦人科「赤門鈴木医院」の開設を礎として、時代ごとに地域のニーズにお応えすることを使命とし、これまで取り組んでまいりました。これからもこの使命を全うし続けてゆくためにも、絶えず邁進してまいります。

赤門の由来

江戸時代に南部藩(現在の盛岡)の御常宿として通称「南部屋」の名称で呼ばれていた鈴木家は、交易の司処として南部藩主より、門柱に朱塗りを、塀の上には高張り(庇)を許されました。この朱塗りの門すなわち「赤門」が名称の由来として今日まで継承されています。



この一枚



赤門整形外科内科の正面に植えられた大木は、明治21年(1888年)赤門鈴木医院開設当初から雄大な姿でこの地を見守り続けている「ビャクシン」の木。

医療法人社団 慶勝会広報誌「赤門だより」通巻53号
発行・責任:「赤門だより」編集発行室
千葉県館山市沼1599番地1、1階
TEL. 0470-25-7300 FAX. 0470-25-7301
ホームページ: <http://www.keishokai.or.jp>
発行日: 平成30年4月15日(年3回)
編集・印刷・写真: 管理部 総合企画